

秋  
の  
月

秋月に名前を刻み 逝きし人

秋月院という 音の悲しさのみ残し

逝きし人の 話尽きなく夜白む

美しき世界に行きし とは聞けど

気配あり 炎ちりちりと鳴りゆらぐ

綺麗な生き様であったと 今に思う

家のため人のために 八十年がありし

人のためにのみ生き 静かに去りぬ

自ら喧伝せざりし人 真似できぬなり

人柄のままを 写真の眼鏡が醸している

四十九日の法要 七人のみで営む

跡途絶え 法要に寄る皆黙しつつ

老僧の読経 ときどきに細く揺れ

このようにして 皆逝きしかと

お斎となり 蟠りやや溶けゆく

逝きし人の心は空にあり と仰ぎ思える

目覚まし鳴る 亡き主の命じたるままに

家絶ゆるという 節目に巡りきたれる

曲折あれど 一つ一つが解れ進みゆく

無人の家となり 日々窓開け放つ

本山送りへの間あり 無人となる

位牌と骨箱の間の 灯りは消さず

良いように進展をみる 秋日嬉しき

窓開け襖を開き 日を風をいつせいに入れ

猫大人しく座す 無人の玄関に

空気清澄の庭踏み 納骨終える

骨箱隣りに父母並びいて 鐘一つ鳴る

七十年八十年が 箱の二つに収まりし

人好きの父母 人訪い来る戒壇院に祀らる

草筆りいる 無人となりし家の庭

四人を見送りたる座敷 しんと静まる

過ぎし日の かの歓声嬌声今いずこ

解体か空き家の維持か 悩み深まる

築三十年の家三棟 もて余す羽目に

広く小高い住居が 不自由を生む

地を上げし住居 段差が障壁になる

小さな平屋をと 幾度も勧められしかど

昵懇の工務店主に 家全般のこと相談す

一昼夜不明の眼鏡 叢に落ちてあり

鬱陶しい問答 よせよせ酒席では

寧日文书く 猫庭にあくびしている

一夜の雨に 金木犀の粉散り敷く

金木犀甘く這いくる 露地に入れば

古刹の塀から流れくる 金木犀満開

命をテーマに唱う 制服生徒ら微笑みて

東雲音なく雨降り 十一月来たる

急激に気温下がり 紅葉淡く色なす

風雨荒れ 確実に晩秋に向かいゆく

山頂に霧かかりいて 雷走る

一枚一枚と黄葉落ち 窓に空広がる

日射しくる 露溜めしままの垣に

大根葉伸ぶ 今朝もバッタの親子乗せ

伸びし大根葉に 最後の追肥する

二十五度の気温戻り 紅葉照れ笑う

落ち葉掃く 額に汗の玉光らせ

雲流れ 家々の屋根に光射す

気まづく別れきし職場 明日は月曜なり

なるようになる 誰も先など見えぬゆえ

隣家の引っ越し 十一月吉日に

引っ越しの部屋に カーテン残され

秋日薄く 内科待合い室に射し入る

川清掃する人 スタッフという腕章付け

ポリ容器ビニール 川原に積み上げられ

ホームページ転送不可 深夜作業となる

単純なミスを パソコンゆるが忽せにせぬゆえ

ドラフト開始 当選札持つ手高く掲げる

相手の胸の内を読み合い 指名する

破顔一笑 意中の球団に指名さる

十八歳の素の表情で 会見に臨める

選ばれるという仕組み 功罪半ばあり

選ばれざりしこと 無言の目がもの言う

一割も名をなさぬ という厳しい世界なれば

南京櫺の朱の輪 くぐり教室に急ぐ

秋日風なく 南京櫺の朱定まる

ふいに刈田現れ 猫のっそりといる

風一つなきに 柿葉つるりと落つ

なにやらん はらりと散りし気配に振り返る

柿葉日を透く 柿色というより赤強し

音なく機がのぼりゆく 月を指し

犬駆け抜けゆきし 露地に雨降る

書くことから始めねば 文の芸ならず

一日の終わりまでに 十句詠むべし

よくも悪くも 詠むことから始む

日々の呟きが 万巻をなすやもしれず

胸に浮かぶを 腕のなすままにまかせ

誌の発行待つ間生まれ 爽天のもと

今回の誌 評の中身の洪きこと

発表するに意義あり さはさなれど

生涯現役を目指す 誌にうたい

発表の場たるべく 同人誌引き継ぎしが

鷺己が姿に見入る 浅瀬に一羽屈みいて

鷺飛び立ちて鳴く 猫のごとくに

奇抜は御法度 四囲の背丈に並ぶべし

仕事すればするほど 疎まれる人あり

普段話す笑顔が 妬みの種になるらし

マスクの顔街中に溢れ 俯き歩く

マスクの奥の表情見えず ただ静謐

新型インフルエンザ 電車をバスを襲う

学級閉鎖続けば いつ学校開くらん

咳すれば いっせいに目が咎めくる

子を看護するという 母の眉険し

若き母なれど 眉根に青き疲れあり

看病の母たち 子の枕辺に寄り添う

風邪の子眠れる 熱去りゆく気配に

空気汚れたるか 人群れ合えば



疲れの後に風邪くる　とはいえど

起き抜けの辛さに　幾度も首振ってみる

ふうっとめり込みそうな気配に　佇む

東へ東へと台風向かう　異変なるや

九州本土上陸なし　今年の台風は変

フィギュアスケート　若き女王悩める

ジャンプに怯える　女王十九歳の横顔

笑顔で会場を後にする　背中が無言

スピードスケート界に　新星生まると

月高く　南天にオリオンのぼりくる

産地直送回転寿司　新規オープン

秋日中　新店舗光りつつ現わる

祝開店のドア前に並ぶ　花に溢れて

百円均一なり　鰯も鯛も鮪も鯖も

抹茶に汁物 人気の品競い選べる

印刷の途中で プリンタ文字吐かず

印刷の途中で 電機店に走る羽目となる

プリンタ新たになれば 掠れる字なし

プリンタ新し 試し刷りの色爽かに

スキャナ機能あり 鮮やかな色合いに華やぐ

紅葉狩り計画す 久方ぶりのことなれば

京都の緋の錦繡 見ざること十年なりき

空透き晴天続く 秋の気にふつと息吐く

運動会総演舞開始 乙女らの唇光り合う

麺送りし母から 到着の便りくる

オオルリというらし 川縁に小鳥囀るは

背の青が光るといふ オオルリを見詰めいる

三光鳥という名をもつ 神の使いなるか

時間勤務終え 戸外明るきに和む

六十の手習いには厳し 会計事務一年経過す

終末らしき夢に 幾たびも悶えし

夜明けに覚め 悲しい思いに沈む

去来する思いなにやらあり 眠られず

地震が風が 南の洋上を席卷する

貧しい村が また浚われゆくのか

名月疾駆す うろこ雲の波を分け

名月あらわれ また沈みゆく雲の海に

柿の葉の照り 空に大輪の花咲くごと

柿葉朱のまま 短日いきなり暮れゆく

釣瓶落としの車窓 稲田尽き川となるらし

高き木に吸い取られゆくか 憂きものが

塞がりしとき 樹間をただに歩く癖となり